

国内研修報告書

「町が移住者を選ぶまちづくり」

研修テーマ: 町が移住者を選ぶまちづくり

研修場所: 神奈川県真鶴町

研修期間: 2月9日～11日

研修参加人数: 4人

ローカルイノベーション論の講義で「町が移住者を選ぶまちづくり」というテーマが紹介されたことをきっかけに、私は神奈川県真鶴町に興味を持った。真鶴町には「美の基準」と呼ばれるまちづくり条例があり、町の景観を守るために町、町の人々、訪れる人々、開発者それぞれが実行すべき行動や考えがまとめられている。この条例は1990年代から現在に至るまで町の景観を守り続けており、町の美しさと調和を維持するために重要な役割を果たしている。一般的には移住者が町を選ぶのが通例だが、真鶴町では町が移住者を選ぶという独自の仕組みがあり、これがどのような暮らしを実現しているのかを知りたいと考え、住民への聞き込み調査を行った。

研修の1日目は、真鶴町を知ることに時間を費やした。我々は真鶴出版社が運営する「泊まれる出版社」に2泊3日お世話になり、町歩きに参加する機会を得た。真鶴出版社は、宿泊者に町を歩きながら町の魅力を紹介するサービスを提供しており、移住希望者と地元住民を繋げる重要な役割を果たしている。我々も実際に町歩きに参加することで、観光目線ではなく、日常の暮らしを中心に町を見つめることができた。観光資源や施設に注目するのではなく、「どんな人々がここで暮らしているのか」という視点が新たに生まれた。この体験を通じて、真鶴町が持つ温かなコミュニティの魅力を感じることができた。

2日目は、真鶴出版社の川口さんにインタビューを行った。川口さんは「真鶴は、ただ残ってきた町ではなく、守られてきた町」と語り、町への愛着がどのように形成されるかについてお話いただいた。川口さんは、町に住む人々が「自分で自分の暮らしを作ること」に面白さを感じている。実際に、移住希望者への町歩きを通じて町と人が繋がり、互いのニーズを共感し合ったことで、美容院やコーヒー屋さんなどができ、町の変化が感じられたと語った。

次にインタビューしたのは、50年間真鶴に住んでいる女性である。彼女は「新しい人が来るのは嬉しいが、昔ながらの店が潰れるのは寂しい」と語り、移住者が増えることについて強く望んでいるわけではないと話していた。彼女の意見はとてもリアルで、真鶴町に対する愛着があるわけではなく、むしろ「ここで生きることが当たり前」という感覚だということが伝わってきた。これは真鶴町の現実的な一面を反映しており、町の中で何気なく続いている暮らしがどれだけ大切にされているかが感じられた。また、後継者問題にも言及し、移住者がいる一方で、地域の高齢化や後継者不足が懸念されていることも確認できた。

2日目の最後には、草柳商店に足を運んだ。ここは、ローカルイノベーション論の講義内でも紹介されていた老舗の酒屋さんであり、真鶴の住民が自然に集まるコミュニティとなっている。店主はあーちゃんという愛称で親しまれている女性だ。彼女は、18時を過ぎると仕事を終えた住民がここに集まって来ると嬉しそうに語った。お店に対しても町に対しても愛があり、彼女が作り上げる暖かな場が真鶴全体の暖かな住民関係にまで輪を広げていっていると感じた。

3日目も真鶴に移住した方々へのインタビューを続けた。元々、真鶴町立中川一政美術館を訪れる予定で組見立てていたが、2日目の川口さんのお話をお聞きしたことで、町の住民の方から直接お話を伺った方が、どのような暮らしを実現しているのかという点で解像度が上がると判断した。そのため、美術館を予定していた時間を変更し、インタビューの時間に割り当てた。そこで、お話を伺ったのは、真鶴に移住してきた2児の母親であり、コミュニティ真鶴という地域の子供達が集う中で、子供の放課後居場所支援を行なっている方だ。彼女は「不便が好きだから」真鶴に来たと話した。不便だからこそ暮らしに余白が生まれ、自由を見いだしていると語った。彼女が真鶴に住んで最も感じている魅力は「人との出会いが繋がっていく町」という点であった。住民同士知り合いで、一人一人の存在がとても大きいと話していた。このような強いコミュニティ意識が、移住者にも温かく迎え入れられる要因となっているのだと感じた。

3日目の最後には、真鶴にUターンをしてきたご夫婦にインタビューを行った。青木商店カフェを営んでいるこのご夫婦は、先代がお店を畳むことになった際、熱海でカフェをしていた息子夫婦が場所を引き継ぎ、カフェを営み始めたという。Uターンしてきた理由としては、父親が真鶴町議員として町をより良くしたいという思いをずっと間近で見ることができた

と話しており、その思いを自然と受け継ぎ、町に貢献しようと感じたという。また、後継者不足で閉店したお店がいくつもあ
ることに触れながら、真鶴町の現状について語った。

私は、真鶴町の良い点として、強い中心がない代わりに小さなドットが自発的に動いていることを挙げたいと考えた。町
の中で、人々が自分のペースで行動し、そこから自然と人と人の繋がりが生まれ、それが町の暮らしを支えているとい
う点が、真鶴の大きな魅力だと感じた。また、町が移住者を選ぶまちづくりという視点から、暮らしが見える場所であり、
人、物、環境が調和してつながっているという点も特徴的であった。移住者側が町を選ぶのではなく、町側が移住者を選
ぶ仕組みが生み出す新しい暮らしの形が見えてきた。

一方で、真鶴町の課題点も見えてきた。それは、まだ暮らしに必要なお店が少ないこと、そして高齢化による店の閉鎖と
いう危機感が消えていない点である。過去には、街で唯一の八百屋さんが高齢化により、閉店仕掛けてしまったこともあ
ると住民は語った。また、移住者は増えているものの、移住者は新たに仕事を作り出すため、次にバトンタッチすることが
難しく、住民の子供たちも町を離れてしまうことが多いため、後継者問題が解決しないという現実がある。町の産業が枯
れてしまう懸念もあり、これからの町づくりには慎重な対応が求められる。

それでも、ここで大事なのは、単に「どこに行きたいか」ではなく、「この人に会いたい」と思える町であることだと私は考
える。そして、今回の町歩きや地域住民の方へのインタビューを通じて、町に対する愛着は、人との繋がりにから生まれるも
のだと改めて実感した。また、町の発展において、誰か一人が無理に0から1を作り出そうとするのではなく、0から0.5、ま
たは0.5から1へと、それぞれが得意な分野で補い合って暮らしを作り上げていくことが重要だと考えた。

このような繋がりの中で、人と町が支え合いながら、産業や暮らしを守っていくことが真鶴町の課題を乗り越える鍵にな
ると感じた。真鶴町から学んだことは、町を変えるというプロセスで、創造的に活動し、地元の人々や移住者との繋がりを
大切にすることで、町全体のバランスを取りながらより良い未来を築いていけるということだ。町の形は、その中で出会う
人々とのつながりによって生み出され、育まれるのだと実感した。その良好な繋がりを育む上で、「町側が移住者を選ぶ」
ことへの重要性も今回の研修で理解することができた。住民主体で町が作り変わる町に私は、希望を感じ、移住したいと
さえ思われた。